

早乙女勝元

小説選集

3

美しい橋



早乙女勝元小説選集

3

美しい橋



早乙女勝元小説選集・3

美しい橋

1977・初版

作者 早乙女勝元◎

画家 久米宏一



制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一五六

電話 〇三(203)五七九一

振替 東京九一九五七三六

B6 郵 238 P 0393—90903—9924

一九八四年九月第五刷

美
し
い
橋



カバー絵・カット
久米宏一

ブ ロ ロ ー グ

白鬚橋。

しらひげばし、とよぶ。

白いひげだなぞという、見知らぬ人は、おそらく枯木のようなヨボヨボの老朽橋を連想するかもしれない。

ところが、それとはまったく逆に、この橋は全長百六十九メートル、幅二十二メートル、巨大な鋼鉄のアーチが弧状をえがいて天を走り、網の目のように鉄骨がびっしりと空をおおって、今にも頭上にのしかぶさってくるようにさえ思える。それはまるで、あの前世紀に生きた重たく不気味な感じの恐竜の姿を思わせるのに充分だ。

たくましいということでは、一点の非のうちどころもない重量感にみちた鋼鉄の橋は、隅田川にかかっている十二本の橋梁の一つで、この川の上流からかぞえて二番目にあたるが、煤煙でどんよりとナマリのように重くにごった東京の下町に面し、交通量がさほどでもないのと、墨田区と荒川区と二つの工場地帯をむすんでいるので、それほど多くの人に知られてはいないようである。

しかし、白鬚橋というよりも、むしろ「お化け橋」とか「身投げ橋」という俗称では、この橋は、

かなりの数の下町っ子たちの頭の隅に刻みこまれているのにちがいない。

白鬚橋が生まれて、すでに三十年に近い。

その長い歲月のうちには、どんなにいろいろな出来事が、この橋の上にあったことだろう。

しかし、橋はおそろしく無口だ。なに一つ語ってくれはしない。したがって、そのさまざまな出来事も、だれひとりとして知ることができない。

……だが、私はたった一つだけ、この橋の上に生まれたささやかな哀しいエピソードを知っている。それは一九五五年のある日、橋の上から歩みはじめた、ある貧しい恋人たちの物語なのである。

昭和六年、白鬚橋は竣工された。

この橋のたもとの千住のガスタンクの町にすむ石田友二^{ともじ}は、その後に生まれてきたので、白鬚橋がどんなにたくさんの人々の労苦と、どんなに長い時間をかけて生まれてきたかを、知ることはできない。けれども、友二はそのあたりのことを、つぶさに見てきたように思い描くことができる。というのは、その頃まだ働きざかりだった父が、目を糸のように細め、たった一つの自慢話のように白鬚橋のことを、幼い彼に語ってきかせてくれたからだ。

父のはなしによれば、白鬚橋はむかしは木の橋で、わたる人はかならず、一錢玉一ツずつの渡り賃をとられたものだという。八十七万五千円もの大金をかけて、このワニザメのようないかめしい橋がつくられたころ兩岸はまだ、

「若草が一面にもえたつ、きれいな土手だったよ」

と、父はよく言葉をつづけたものである。ところが、それからまもなくすると、奇怪なうわさが持ちあがったのだそうだ。

真夜中、橋をわたっていくと、ちょうど八本目の支柱のところに、白い着物をきた美しい少女が立っているのだという。目鼻立ちこそすっきりと澄んでいるが、その顔の色は夜目にもぬけるようにほの白い。人が通るのを見ると、もの悲しい調子のうたを、ほそぼそと笛^{ふえ}でも吹くようにうたう

という。早足に通りすぎて、おそるおそるふりかえってみると、もう少女の姿はあとかたもなく消えている。それで「お化け橋」とよばれたのだそうだ。

その少女は、どうやら土手にすんでいるか、わう、そのいたずらだろう、ということになったが、それからしばらくすると、やがて渦のように暗い不景気の時代がやってきた。こんどはお化け橋を利用して、橋上から隅田川に投身して死ぬものがつぎつぎとあらわれ、これで、お化け橋は「身投げ橋」という名にかえられたのである。もちろん、いつのまにか、美しい少女もいなくなっていた。生活に追いつめられて、隅田川へとびこむ者に心よせた少女は、その行動を一つにしたのかもしれない。

友二は、床の中で、父からよくそんな話をきかせてもらった。さえずえと澄んだ少女の表情が目の裏にうかび上ってくるようだった。彼は幼いころから小心で虚弱で、いつも人から「青びょうたん」とか「うらなり」といわれ、さげすまれてばかりいたが、心のおくでは今にみろとつぶやいていた。今に大きくなったら、きっとたくましく男らしくなってやるぞ、と心に誓った。そして、そう思う彼の頭の中には、あの白鬚橋が、はがねのつばさをひろげ、どっしりと微動だもせずにかかっていたのである。

こうして月日はながれた。貧しい日々の中に、長くてみにくい戦争が津波のように押しよせてきた。巨大なガスタンクの丸屋根に、ブスブスと蜂の巣のような穴をあけて焼夷弾がおちた。たった一日で、リヤカーに一台分もの焼夷弾のカスがたまった。それでもタンクは燃えずに残って、戦争は終りを告げた。そして、まもなく過労で父が死んだ。

いつしか、友二は十代をこしていた。

小学校の高等科をおえるとすぐに、彼はあちこちの工場で働き、人なみにちいさな機械を動かし、ハンマーもふるってきたのに、どうしたわけか、ちっともたくましくも男らしくもなれないのである。なれないばかりではない。幼いころの夢とは反対に、彼はいつも人からおしのけられてばかりいて、人をおしのけかきわけなければ生きていけないような、このすさまじい社会から、常に邪魔者のけ者にされ、はじき出されてしまう。

そういえば、すべてが暗くて重くてあさましい時代であった。大の男が陽の目もみずに働いても、自分ひとり食うのがやつとのことであり、ひとたび職を失おうものなら、働こうとしても、働くところのめったにないというような時代だった。

人々は、いつしか希望を忘れ、日々に光をうしない、どんなにかみにくい行いのなかにも、自分だけの小さなしあわせのみを、わが手にかきあつめようとする。自分よりも不幸につきおとされた人を見る時、はじめて、そこにわが身のしあわせをたしかめ、安らぎをおぼえ、いちだん高いしあわせにたどりついたような錯覚さえおぼえる。じっさい、このごろ町を歩いている人々の、なんとつめたく貪婪なこと！そして、なんと重たくよんだひとみだろう。そこには生氣もみられなければ、したがって活気もないし、なにもしないかわりにまちがいもなかった。毎日まいにちが同じ流れの中にすぎて、変哲のない時間との妥協の中に、いちにちまた一日と終着駅に近づいていくだけなのだ。

石田友二は、その影が自分の心にも、ひそかにしのびこんでくるのにおののく。彼はどんなに貧しく、どんなにささやかであつてもいい、自分の心をあざむくことなくせいっぱいに生きたいと

ねがう。おどろきと怒りとを忘れたくないと思う。どれほど年をとっても、子どものような、まっすぐな夢を追いつづけたいと思う。

だが、そう思いつつ、職を失ってもういく日が過ぎていったことだろう。こうして一体どこまでいったら、新しい生活が目の前にひらけることだろう。彼は、思わず頰杖をついてしまう。どこまでいっても、新しい生活なぞ一向に現れそうにない。まるつきり変化のない日々のつらなりだけが、無限に目の前にある。そのほかには、ああ、なんにもありはしない。

ぼんやりと、ただ手をこまねいているのではなかった。

彼は、連日のように、町から町をさまよい歩いたのだ。

「働かしてください、なんでもいいですから働かしてください」と。

けれども、そこに待ちかまえていたのは、たった一人の若者でさえもわりこむ余地のない現実であり、つまらない良心なぞ犬にくわれてしまうがいい、というひややかな世界なのだ。町はどんよりと沈んで暗く、どの家のをぞいても、心からの笑いが見えそうもなかった。だから、ひとたび町に出ると、なおさら暗い気持を背おって、スゴスゴと舞い戻ってくるのである。友二は、もうあきらめている。世の中をあきらめる一方で、自分のしあわせをもあきらめかけようとしている。

そしてこのごろ、彼はすっかりやせた。

頰の肉がおちた。二十歳を越して、わずか一年にしかないというのに、その表情は暗くゆがみ、若者らしさがしだいにうすれていく。母はオロオロして、

「のんびりしろよ、気にするな、今になんとかなるで」

だが、そういう母が、そういうながら、そういうことで日増しに老けていくのが、なんともいたましくてやりきれない。

兄が嫁をもらい、その嫁がそとに働く家で、乳飲み子を守り育てていくうちに、母の身体はいつしか前かがみにうつむき、ほんとうに小さくなってしまった。子どもは伸びざかりである。ちっとも目を離してはいられない。手あたりしだいに、なんでも口にいれる。クレオンで、疊に大きな円をかく。母は掃除をしながら、そのクレオンの線をあくせくと指でつまんでいる。母の目は老いて視力がうすれてきたのである。

「カアちゃん、それはイサムのいたずら書きだよ」

「……………」

「クレオンだよ」

「ああ……糸かと思ったよ」

と母はつぶやく。

子どもを育てることに、自分のいっさいののぞみをかけ、映画一つみるでもなく、六十の声をきこうとしているこの母に、

——ああ、おれは、まだ心配をかけているのだ。

それが、彼の心にくいこむのである。

友二は、兄の子を背おって外に出る。

ガスタンクの町。煙の屋根をもちススの雨のもとにひろがるカサブタのような人家。いたるところに、ベルトコンベアが縦横に流れ、一かけらが人間の頭ほどのばかりでかいコークスの山が、町中をゴトゴトと音をたてて流れていく。ぐわんとそそり立つタンクの方からは、ススがバラバラと散って、せんたくものを真黒に染め、赤子の目の中にもつきささる。イサムは泣き出す。涙がイサムのかたまりない表情を、いっそうくしゃくしゃにさせてしまう。「おお、よしよし」と、いくらいってみても、事態はちっともよくはならない。

しかし、友二は、この子がいじらしくてならないのだ。ひるま、どんなに泣いてわめいてみたところで、イサムの母はかえらないのだから。赤んぼうの唯一の特権である大好きな母親の乳にもありつけないのも。だから、ちいさな身体に満身の怒りをこめて、この子は、泣いて抗議をするのだ。小さな意志を強く外に主張しているのだ。

「泣くがいいよ、もっと大きな声で、ちからいっぱい泣くがいいんだ」
友二は、ほんとうにそう思うのである。

だが、そう思いながら、イサムがいつまでも火のついたように泣きつづけ、どんなにあやしても、一向に泣きやまずにいると、彼はこの子よりも、むしろ自分のほうがやりきれなくなってきた。しかたがない。ほんとうは、彼もイサムのように大声をはりあげて、泣いてみたいと思うのである。しかし、どんなに大声たてて、泣きわめいてみたところで、それが一体なんになるというのだろう。笑いのものになるだけのことだ。そして、いっそう母をオロオロさせて、その命をさらにちぢめるだけではないのか。

その日も、友二はイサムを背おって、いつものように橋に出た。

イサムは、白鬚橋が大好きだった。

ついこのあいだまでは、手すりからのびあがって、橋下をくぐりぬけていく蒸気船と、そこからきだされるまるくて白い、ドーナツのような煙をみると、この子はびたりと泣きやみ、足をバタバタさせて喜んだものだった。しかし、何回かそれをみせるうちに、今はききめもなくなってしまうらしい。やっぱり、母の乳が恋しいのか、イサムは泣きつづけた。いつもしめって乾くことのない友二の背で、イカのように身体をはって、幼い子は引きさかれるように激しく泣きつづけた。

かごめ かごめ

かごのなかのとりは

いついつ出やる

夜明けの晩に 鶴と亀とすべった……

そんなうたを口ずさみ、背を左右にふりながら、友二は長い橋の上をいったりきたりした。やがて泣きつかれて眠ってしまうかもしれないぬとおもい、そこにせめてもの期待をかけて、彼は記憶の底にのこっている童謡をひくく口ずさんだ。

あたりは薄墨をぼかしたように暗く、すこしばかりの風が思いたしたように水面をつたわって、

橋の上にまでせりあがってきた。ガス会社をひけた労働者たちが、黒装束で黒い表情で、ふりむきもせず、スタスタ通りすぎていった。時計の振り子のような足どりは、機械じかけの、うつむいたロボットのようにもみえた。その背後からチリチリと音をたてて、自転車がおった。チリチリという音だけはまあたらしかったが、乗っている人の顔には、まるで表情がみえなかった。ただ疲れきった色だけがあった。

音くて、悲しい時間だった。イサムは泣きやまなかった。

その張りさけるような泣き声をきいていると、まるで、自分とこの子だけが世の中の動きからとりのこされ、見捨てられ、みなし子のように、おどおどしているように思えてならなかった。こんなとき、船が走ってくればよいのだがと思い、橋のらんかんにもたれて下をみた。船はみえない。かわりに、隅田川の水がひどくドス黒くにごって、目の前一面コールタールでも流したようにみえた。そのどす黒いにごりが、つぎからつぎへと足もとにむらがり集ってきては、クルクルと渦をまいて、橋の下に吸いこまれていく。……今にも目がまわりそうだ。渦の中に吸いこまれてしまいそうだ。しかし、さらにじっと見つめていると、押しよせるドス黒い流れの中を、橋と自分とが、流れにさからって、グングンつきすすんでいるようにも見えるのは、これは一体どうしたわけだろう。

.....

ふつつりと、イサムは泣きやんだ。

重苦しい空気が、にわかにかき消えた。

友二は、おどろいてふりかえってみた。おどろきは、そこでさらにかさなった。思わず息がつま

った。彼は大きく目を見張った。そしてまばたきした。いつのまにやってきたのだろう、どこの世界からやってきたのだろう。太陽みたいにあたたかく、星のようにキラキラ光った微笑の眼がそこにあった。

「ほうら」

と、少女は、はずんだ声でいった。

「泣きやんじやったわ」

少女の横顔を、友二はみつめた。そっと眼の中にきざみこむようにして。

「あら、もう笑ってる！ 涙をこんなにいっぱい出してさ。もったいないなア」

少女はイサムの涙をぬぐってくれ、その背中をかるくゆすってくれたが、友二の視線にかちあうと、とまどったように、目をしばたかせた。赤い頬の上にかすかに睫の影がよぎった。

「この子、大きな声で……」

と、少女は、まるでつぶやくように言葉をにつづけた。

「いつもいつも泣いてるじゃない、げんきな坊やなこと」

そのとき彼は気づいた。少女が、イサムの手になにかをあずけたことを。イサムは、それとこのお陽様みたいな少女の出現に、すっかり御機嫌なのである。すると子どもは正直だ。いっぺんに泣きやみ、友二の背中で、足をバタバタさせてはしゃぎまわっている。誇らしげに、その手を左右にふりまわした。

で、友二は、この見しらぬ少女が、イサムに可愛らしいオモチャのラッパをくれたのだ、という

ことを知った。ラッパには、小さな丸いボタンがいくつもついており、そこから、ふさのついた青い紐がバネのようにはずんだ。

「このラッパ、とってもむずかしいのよ」

赤い頬の少女は、顔中で笑った。

そして、まず自分で吹いてみせた。少女の頬がみるみる風船のようにふくらむと、実に奇妙な音色が、小さなラッパの口もとからあふれて、ひよろひよろと外にとび出した。イサムは声をたてて笑った。少女も笑った。マジック・ラッパだという。

「坊や、いい子だもん」

ラッパを、ちいさな手にあずけながらいう。

「ごほうびに、ね？ ほら。だからもう泣いちゃダメよ」

にっこりと笑う。ほてって上気した丸い頬に、白い歯なみがスッキリとのぞく。真珠のような光。びよこんと頭をさげて、友二に軽い会釈をおくると、おさげにあんだ髪の毛が肩にゆれた。まるで振り子のように。そして、くるりとふりかえってちょっと手を上げたかとおもうと、小さなスカートが風になびいて、少女はもう橋のむこうに小さくなっていた。つぎの瞬間、鉄工場の出ばったクレーンの陰に消えてしまった。

それは、ほんのまばたき一つするような、みじかな時間の出来事だった。

しかし、友二はさっきから、同じ場所にじっと立ちつくしていた。うごくことさえもできなかった。彼がなにもいえず、棒みたい橋の上にたちつくしているうちに、少女はふいに風のようにど